



# JSPS London

# NEWSLETTER

No.46  
2015.8-2015.10



Photo: Long walk to the Windsor Castle

## Contents

### Japanese articles

- P02. 巻頭特集「欧州と日本の学術交流・研究の環境」
- P05. センター長のつぶやき⑤「数値化への憂い」
- P07. 英国学術調査報告「大学入学定員枠の撤廃」
- P11. 在英研究者の者窓から 第5回  
ポーツマス大学 阪本章子
- P12. ぼりーさんの英国玉手箱  
「英国人の余暇の過ごし方(後編)」
- P13. スタッフが見た英国

### English articles

- P14. JSPS London Symposium Scheme in Strathclyde
- P17. JSPS London Symposium Scheme in SOAS
- P19. JSPS Open Partnership Joint Research Project in UCL
- P20. JSPS Core-to-Core Program official kick-off meeting in Glasgow
- P22. Pre Departure Seminar and Alumni Evening in JSPS London
- P25. Voice! from Alumni member Vol.1  
Prof. Andrew Quantock
- P28. JSPS Programme Information

## 巻頭特集

## 「欧州と日本の学術交流・研究の環境」

JSPSボン研究連絡センター長  
小平桂一(こだいらけいいち)

専門分野:天体物理学

国立天文台長、総合研究大学院大学長を歴任後、平成20年7月より現職。  
国立天文台ハワイ観測所設立に尽力。東京大学名誉教授。



JSPSロンドン研究連絡センター長  
竹安邦夫(たけやすくにお)

専門分野:生命科学

16年間アメリカの大学で研究と教育に従事。その後約20年間京都大学で研究と教育の傍ら、国際交流委員として国際教育・国際交流に尽力。  
平成26年5月より現職。

10月1日、当センター長竹安邦夫(写真右)が小平桂一JSPSボン研究連絡センター長(写真左)(以下、敬称略)のもとへ訪ねて、独・英両センター長としての意見交換を行いました。

**竹安:** 本日は、お忙しいところありがとうございます。小平先生は学術研究の国際交流に長年携わってこられたと思いますが、国際交流を長く続ける秘訣をどのようにお考えでしょうか。

**小平:** 草の根の人脈を活かしたボトムアップが大事だと思います。人と人との結びつき、お互いに良いところを持ち合う姿勢。「自分のところで事足れり」という意識を捨てて、相手の国や研究に対する好奇心を持つ、と言ったところでしょうか。

**竹安:** 自分とは異なる得意分野を持っている相手と交流することで新たな知見を得ることが出来ますね。

**小平:** そうですね。また、日本の研究者が海外へ行く場合、若ければ若いほど、柔軟にランゲージバリアやカルチャーバリアを乗り越えやすいと思います。

**竹安:** 私も同感です。ただ、私が一つ言いたいことは、英語の勉強も大事です

が、日本語を適切に話せる・使えるということが出来た上で、外国語を学ぶことが大事だと思います。母国語を大事にすることは国の誇りに繋がります。

**小平:** 「言葉は文化」と言いますからね。

**竹安:** 逆に、海外の研究者の「日本に来たい」というモチベーションを上げることについてはどのようにお考えでしょうか。私は、日本の学問レベルを維持・向上させることが肝心だと思っています。学問的に優れていたらやってくる、と。

**小平:** 日本は学問レベル以外のところで損しているのではないのでしょうか。日本から帰ってくるドイツ人研究者から「日本の大学は窮屈。自由度が少ない。ヒエラルキーが強すぎる。」という話をよく聞きます。

**竹安:** 日本でも外国でも、外国人研究者の受入れに熱心な日本人研究者がいる、というのをもっとアピールすべきですね。ロンドンセンターでは年に10数

校の英国大学を訪問してJSPSの事業説明会を開催しているのですが、ロンドンから遠く離れた地方の大学に行っても、ご活躍されている日本人研究者がたくさんいらっしゃいます。

**小平:** 私も最近、そういう事例をよく耳にします。優秀な研究者はちゃんと海外に出てきていますね。しかしながら、「日本では研究の自由度が減ってきている。自分のやりたい研究があっても、今のプロジェクトで成果を出さないといけない。」ということが日本の研究者が海外に出るインセンティブとして働いているとしたら、少し皮肉な感じがしますね。ドイツはマックスプランク研究所を始め、基礎研究の自由度が高いと感じます。州が基本的な研究費をサポートするため、「競争的経費が増えるのに対して運営費交付金が減る」ということはドイツの大学の場合はありません。

## 「欧州と日本の学術交流・研究の環境」

**竹安:**話がそれますが、日本の場合、物品の購入手続きが欧米に比べて煩雑だと感じます。例えば、欧米では3枚綴りの伝票を一回書けばそれで終わりという感じですが、日本の場合、各部署毎に経理担当が居て、処理に時間がかかります。

**小平:**私が思うに、欧米は個人責任、日本は組織責任ということが影響しているのではないのでしょうか。そのため日本は中間管理等が厳しくなっています。

**竹安:**ドイツやスイスの電車の駅に改札がないのが個人責任の最たる例だと思います。たまに車内で車掌が切符のチェックにやってくる。タダ乗りしている人がいるかと思いきや、みんなさつと切符を差し出す。

**小平:**日本の場合は、改札をくぐった後は鉄道会社の組織責任になりますね。



**自立しつつも、社会との信頼関係を築ける大学を目指すべき**

**竹安:**大学のほうも、いかに「自立した大学」になるかが大事だと思います。例えば、ケンブリッジ大学の教授の話

によると、当大学は国から研究費をもらっていても、学問への干渉は受け入れない。国がなにを言っても、学問的には一切聞かない。

**小平:**日本のいわゆる帝国大学の場合は、戦前の時代までは総長の権威が相当あって、文部大臣とやり合っていました。当時に比べて現在は社会的な格が下がってしまっているように感じます。メディアの目も厳しい。また、地方中小大学の地方自治体に対する発言権も弱い。アメリカのように中小の地方大学を一つの法人としてまとめて、その中で各大学が自由度を持ってそれぞれの特色を活かした研究・教育を行う、ということをするれば、財界や地方自治体に対しての発言権が増すと思われそうですが、今はそれぞれの大学が競争下に置かれているから、なかなかまとまろうという話になりにくいのではないのでしょうか。

**竹安:**学生と社会との繋がりについてはいかがでしょうか。

**小平:**ドイツの大学では、ドクターを取るまでに、学部3年、マスター2年、ドクター3年と、計8年かかります。その間、実社会で1年くらい経験を積むのが普通です。大学が外に知恵を出しているだけでなく、逆に社会からも知恵をもらっているという、「大学と社会との智の循環」という認識が強い。それゆえ、大学が社会に対して働きかける様々なパス(道)が社会に埋め込まれており、社会と大学の信頼関係が構築されて

いる。日本では、智は大学から社会に一方的に出て行くもので、それに対して社会は大学に資金を援助しているという構図が一般的だと感じます。大学は社会からの資金を獲得しようとしている、という印象で、社会と大学の信頼関係が十分でないのではないのでしょうか。

**竹安:**研究者に対するマスコミやメディアの目が厳しいのも、社会との信頼関係の問題だと思います。

**小平:**大学という教育組織に対しては自分の子どももお世話になっているということもあって、個人的に大学に対して悪く思っている人は少ないかもしれませんが、社会全体の風潮ということになると、日本の社会の中で、「学術に対する親近感」が薄れています。明治の頃は、日本全体がよくなるために大学に頑張ってもらいたい、新しいことを学びたいという社会の期待が強かった。その後、高度経済成長期等を経て、日本全体がよくなったため、現在では「学術に対するニーズ」が薄れてきているかもしれないですね。



## 「欧州と日本の学術交流・研究の環境」

**教養という裾野があってこそ、高みに辿り着ける**

**竹安:** それに関連して、私は「教養」に対する意識も薄れてきていると感じます。昔の大学は今より教養が身につけやすい環境にありました。いわゆる「ほったらかし」の期間がありました。その自由な時間に何か自分の興味のあるものを見つけてそれに喰らいついていく。そうして社会に出る準備が出来ました。

**小平:** 人生の中の人格形成期、その期間に自由に伸びられないと、型にはまったことしかできなくなりますね。

**竹安:** 今はその期間にゆとりがありません。知識を詰め込んだらそれでおしまい、という具合に。

**小平:** そういう教養のない自然科学者が増えるのは恐ろしいことです。科学技術が進めば進むほど、教養のベースが広がらないと方向性を見誤ってしまう可能性が高まります。

**竹安:** 人を教育する学校の先生等にとっても教養は重要ですね。ドイツでも同様かもしれませんが、イギリスでは40代、50代の方が小学校の教員になることがよくあります。人生経験を通じて教養が身につけている人たちが先生になるのは、安心感があります。教養とは、教え込まれて身につくものではなく、「自分から自発的に興味を持つ、自分から気がつく」ものです。そのように促すことが大切だと思います。

**小平:** 「教育、人育て」というときに、日本の場合は既成の教育を教え込む、習得

させるという感じですが、欧米の場合は、その人の内にあるものを引き出す、自発性を高めることにウェイトを置いています。日本の生涯教育を見ても、社会人学校やカルチャースクールに向かいがちで、新しい資格を得て職業的に活かせるというレベルまで到達しにくいと感じます。

**竹安:** 「働きアリの原理」をご存知でしょうか。働きアリの集団には、①よく働くアリが2割、②普通に働くアリが6割、③働かないアリが2割いると言われています。③を削ると、②から③になるアリが出てきます。逆に①を削ってみると、今度は③から①になるアリが出てきます。このようにして、集団の多様性が保たれ、尊重されるのが生物学の基本的な考え方です。

**小平:** なるほど。今の日本は、研究の現場に市場原理を優先させ過ぎていると感じます。効率化・重点化ということがあまりにも物理的過ぎる。もっと生物学的に考えて、「生物集団全体」としての合理化が必要だと思います。

**竹安:** 多様な学問に触れることで、新しい考え方が生まれてきます。富士山の頂上だけ取ってこようとしても不可能ですね。

**小平:** 「裾野は無駄」という考え方は良くないですね。裾野があってこそ頂上に辿り着けます。

**竹安:** 欧州における日本のサイエンスの存在感はいかがでしょうか。

**小平:** 今のところは日本のサイエンスの存在感がありますが、将来どうなるか、

危惧されます。今の日本では、人育てに対して十分な資金投資ができていません。存在感を継続させるには、若い研究者を育成することに力を注ぐ必要があります。

**竹安:** そういう意味では、JSPSの「ボトムアップ」の援助が非常に大事ですね。今の日本の「文化の基礎」を支えているのがJSPSです。基礎研究への支援を出来るだけ削らないようにしてほしいです。

**小平:** そうですね、JSPSは日本の研究の要です。研究者が研究に集中できるように、出来るだけ余分な手続きを簡素化してほしいと思います。今、JSPSの科研費で繰り越し可能な基金化が徐々に進んできています。この流れを維持して、弾力的に運用できる基金化を一層進めてほしいです。

**竹安:** 我々海外センターも、より一層日本と海外との研究交流支援に尽力していきたいですね。本日は、貴重なご意見を頂き、誠にありがとうございました。



ボンセンターの皆さんと。上部左から佐々木国際協力員(ボン)、西崎副センター長(ボン)、田尾国際協力員(ボン)、岡田国際協力員(ロンドン)

## センター長のつぶやき⑤ 「数値化への憂い」



ロンドン研究連絡センター長  
竹安 邦夫

「もの」の価値を数値化することは「ある場合」には便利で有意義でしょう。BMWの新車の価値、化粧品の新製品の価値、その他もろもろ、数値化された‘値段’がそれらの価値を代表していると思われます。一方、古い絵や骨董品のつぼの価値とか文学作品の価値などになると数値化することが難しくなります。しかし、こういった場合は、それらの数値に同意しない人がいても、「価値観が異なる」ということで一向にかまいません。

### 1. 大学の価値の数値化は難しい

近年、大学の値打ちを数値化した「ランク付け」に一喜一憂する場面が多々出てきました。ここでの大きな問題は、大学の何(どの側面)をどのように数値化するのか、ということです。英国のTimes Higher Education (THE) という雑誌が毎年「大学の世界ランキング」を発表しますが、何をどのように数値化してもトップ20位以内の大学の顔ぶれは毎年ほとんど同じです。数値化の対象と方法によって大きく順位が変わるのが、それ以下の大学です。トップ100位以内に入ったかどうか、ということで一喜一憂するわけです。今年も数値化の対象と方法が変更され、ここ数年同様日本の大学2校がトップ100位以内にはいるものの、それらの順位が大きく下がりました。しかし、トップ800位までには日本の大学が41校リストアップされています。この数は、アメリカとイギリスについて、世界第3位だそうです。

THEの数値化の対象には「Education」「Research」「Citation」のほ

かに「International Outlook」というのがあって、留学生の数がものを言います。日本の大学の場合、この項目の数値が極端に低い。そこで、世界ランクの低い大学は留学生の獲得にやっきになります。世界有数の研究型大学がひしめく現在、教育・研究のみでランキングをあげることは非常に困難です。一番手っ取り早いのが「留学生の数を増やす」ことです。世界のトップ50校くらいなら放っておいても留学生は入ってきます。しかし、ランキングの低い大学となると、そうは言っておられません。何とかして留学生の数を増やすことにやっきになります。一方、一生懸命選抜した自分の大学の優秀な学生が他の大学へ出て行くことは嬉しいことではない。そこで、ダブルディグリーを餌に、学生を引き抜くことなしに自大学の留学生を増やそう、ということになるわけです。この傾向は、EU諸国をはじめ、東アジア、オーストラリアで特に強いのが現状です。韓国のある有名大学では、アメリカ人教師を夏の数週間だけ駆り出して、いわゆる「サマースクール」なるものを開催して周辺諸国の学

生を集める、というような「あからさまな戦術」を展開しています。

ここ10年あまり、文部科学省は大学グローバル化の一環として、「ダブルディグリー」制度の推進に力を入れており、かなりの予算をつぎ込んでいます。要は「大学の学部4年間、あるいは大学院修士課程2年間のうちに外国留学をして日本の大学と外国の大学から2つの別々の学位を取得する」という制度の推進です。私の知る限り、日本からのダブルディグリーを受け入れている英国の大学(学部・修士課程)は、自分の大学の生徒を日本に送って日本の学位を取得させる気はありません。日本から「お金を受け取って」自分のところの学位を与えるだけの一方通行です。こうすることによって、自大学の留学生の数が増え、大学世界ランキングが上がることを期待しているわけです。そこまでして世界ランキングを上げる意義はあるのでしょうか。自分の大学の独自の戦略に自信があれば、大学の世界ランキングなどそれほど気にする必要はないと思います。大学の価値の数値化はむなしなものですが、

## 2. 人の才能・独創性の数値化は不可能

人を啓発する、弟子の潜在能力を引き出す、才能を育む、それらは奈良平安の昔から非常に難しいことでした。時間、忍耐、それに資金もかかります。こうして育てられた有能と思われる人材の能力を測ることは非常に困難なことです。このような状況のなかで、近年、特にここ20年ほど前から「能力」を「資格」で置き換える風潮が強くなってきました。

一般的に分かりやすい資格獲得への道は、専門学校へ入って必要な単位を修得する、場合によっては国家試験に合格することでしょう。最近ではこれを大学でやろうという風潮がはやってきて、私の知る関西のある有名私立大学では「140数種の国家資格を取得できる」というのがうたい文句になっています。こういった資格獲得は「スプーンフィード的教育」で達成できます。こういった資格とは、〇〇高等学校卒業、△△大学卒業、といった程度のことで、才能や独創性を保障するものではありません。

たとえば、英語検定だとか漢字検定、タイプや秘書の資格ありといったことだけで秘書としての「才能」は保証されません。また、「博士号」を取得しているということだけで、「独創性のある研究者」かどうかは分かりません。日本の

「英検」1級合格です、「TOEIC」900点です、なんて言われると、「わあ、すごい」と思われる方も多いかと思います。しかし、実際に研究室に入ってきて研究発表を英語でする、成果を英語論文にする、となると、まともにできる学生は非常に少ないというのが現状です。

学校を卒業した、資格を取った、国家試験に合格した、だけでは能力、才能は保証されないということです。資格はあっても良いが目的・目標ではない。才能の数値化、資格付与の意味はよく考える必要があると思われます。

## 3. 数値化できないものを大事にしたい

数値化による評価・ランク付けは、スポーツ界や産業界においてはそれなりに有意義であるようです。ここでの評価・ランク付けは、専門家たち(元スポーツ選手や産業界の重鎮)によってなされる、あるいは同意されることが一般的で、素人の野球評論などは合理的意味が少ないように思われます。また、そこにはいろいろな評価基準があり、評価結果には多様性が存在します。一方、科学界や教育界の評価・ランク付けは、非専門家(商業誌や役所の人)たちによってなされる、あるいは恣意的に選ばれたデータに基づくことが多く、それ自体、現場とはかけ離れた非合理的論議に陥りやすいように思われます。そしてそこには、決まった定規

で測定した「多様性のない」順位付けがあるだけです。

「商業誌が発表する大学ランキング」によって画一的スケールで、一律にランキングする意味はそれほど無いと思われれます。そこには科学界・教育界の現場の多様性が排除されているからです。重要なのは、我々自身が多様性を尊重し、数値化できない才能や独創性を見る目を日々養わなくてはなりません。

ここ数年連続して、日本人研究者にノーベル賞が与えられている。もちろん喜ばしいことであります。ここで注目すべきことは、20数名の受賞者のうち数人を除くほとんどは30-50年前に活躍した研究者で、旧文部省の科学研究補助金や「校費」と呼ばれる教育研究経費によってサポートされた「多様性」を背景に活躍された人たちです。今日のトップダウン式の巨大な科学技術予算のサポートによるものではない、という歴然とした事実は注目すべきことです。受賞者たちは「人のやらないことに興味を持って、そこに切り込んだ」「結果は予想できないが、とにかくやってみてかかった」といった内容の発言をしています。こういった自由度が許されない限り、科学界・教育界の多様性は生まれず、学術研究の本当の発展はないと思います。この意味で、(独)日本学術振興会の役割は非常に重要であると考えます。今日この頃です。

# 「大学入学定員枠の撤廃」

## Point

- 入学定員枠の撤廃により、大学入学者数は過去最大となる見込み
- 大学の財政構造の変化が、入学者数の増加と授業料の上昇を余儀なくしている
- 回収不能となった学生ローンの累増が懸念される

## Introduction

2015学事年度からイングランドの大学における入学定員枠が撤廃された。

本件は、英国政府が定員管理政策を放棄し、学生の獲得において大学間の自由競争に道を開いたという意味で画期的な出来事である。その位置付けと想定される影響については、2013年12月に本件が発表された際、本news letterの当欄でも論じたところである(注1)。

入学定員枠の撤廃後はじめて実施された本年の大学入学統一試験の結果、合格者数が過去最大となることが確実となった。本件には、英国の高等教育改革の方向性が集約して示されていると思われるため、あらためて経緯を整理するとともに、その意味するところを考えてみたい。

## 大学入学者の増加と質の低下

図1は、英国の大学入学統一試験である「Aレベル試験(注2)」の出願者数と合格者数の推移である。

2012年に授業料の上限が年間£3,000から£9,000へ大幅に引き上げられた際に大きく減少したものの、その年を除くと、出願者数、合格者数とも増加傾向にある。

英国では2010年頃には、大学進学に必要とされる成績を満たした学生のうち、約6万人が入学定員枠の影響で大学進学を断念していると言われていた。そのため、政府は段階的に入学定員枠を拡大してきた。2012年度に導入された「コ

ア・マージン枠(注3)」と「AAB枠(注4)」は、定員管理制度を維持しながら、一部の学生について、大学が追加的に獲得することを認めた制度である。次いで、2013年12月、毎年政府が発表する『秋季財政報告(Autumn Statement)』において、2014年度に定員を3万人拡大、2015年度からは定員枠自体を撤廃することが示された。定員枠の撤廃後はじめて実施された本年のAレベル試験には、6月30日の締切時点で67万3,040人(昨年同時点から2%増)が出願し、8月28日時点で合格者は49万4,110人(昨年同時点より4%増)となった。最終的には、両者とも過去最大となることが確実視されている(注5)。

英国には1963年の『ロビンズ報告』以来、「高等教育は能力と意欲のある全ての人間に開かれるべき」という「開かれた高等教育」の理念がある。その理念からすると、高等教育への参加機会が拡大することは無条件に歓迎されると言える。しかし、多くの場合、量的拡大は質の低下を招来する。図1を見ると、出願者数の増加に比して合格者数の増加が大きく、合格率は僅かながら年々上昇している。それに伴い、従来ならば合格していなかったレベルの学生が合格していると思われる。実際に、Aレベル試験でBBB以下の成績であった出願者(18歳のみ)が合格した割合は、2010年度には74%であったが、2014年度に



(図1) 英国の大学(フルタイム学生)への出願者数と合格者数の推移  
UCAS“End of Cycle Report 2014”より

<https://www.ucas.com/sites/default/files/2014-end-of-cycle-report-dec-14.pdf>

は81%に上昇している(注6)。このまま合格者が増加していくと、従来、定員枠の影響で入学できないとされた6万人が首尾よく高等教育にその位置を見出した後に、入学者の質の低下が起こることが予想される(注7)。

### 大学の財政構造の変化

図2は、イングランドの高等教育機関を所掌するイングランド高等教育財政会議(HEFCE)(注8)の予算推移である。

HEFCEの予算は、教育交付金(teaching grant)、研究交付金(research grant)、その他(施設整備、個別プログラム運営資金等)の3つに大別される。このうち、教育交付金は従来、定員数など各大学の規模によって配分額が決定されていた。定員枠の撤廃後は、研究交付金同様、大学毎のパフォーマンスの評価に応じて配分されることになる(注9)。

一瞥して明らかのように、近年、研究交付金は維持される一方で、教育交付金は著しい削減を余儀なくされており、

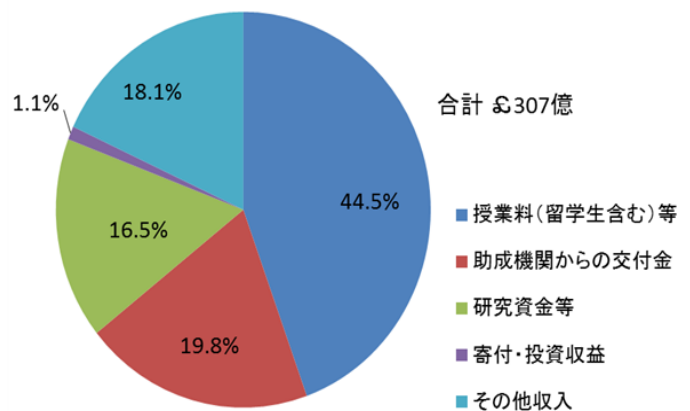
2015年度予算では、ついに両者の額が入れ替わった。入学者数が増加する中で全体の交付金が減少しているということは、当然ながら学生一人当たりの公的助成が減少していることを意味する。このような状況を反映して、大学運営に占める授業料収入の比重が増している。

図3は、2013年度の英国の高等教育機関の収入内訳である。高等教育機関の全収入のうち、授業料収入が半分近い44.5%を占めている。この割合は2010年度と比べて13.6%増えている。一方、HEFCEの交付金が含まれる「助成機関からの交付金」の割合は同期間に13.9%減少している。なお、EUや英国研究会議(RCs)などからの競争的資金が大部分を占める「研究資金等」の割合はほとんど変わっていない。その結果、一部の研究に特化した大学以外にとっては、いかにして授業料収入を増やすかということが最大の課題となっている。授業料収入を増やすためには、学生数を増やすか授業料を上げる以外にはない(注10)。現在、英国の大学の年間授業料上限額

は£9,000であるが、ほとんどの大学で上限一杯まで授業料を設定している。

表1は、英国の有力大学で構成するラッセルグループ(注11)の2015年度授業料一覧であるが、伝統的に量より質を重んじてきたラッセルグループのほとんどの大学では、授業料は既に上限に達している。また、スコットランドの大学では、従来、自地域(およびEU諸国)出身学生に対して授業料を免除してきたが、2015年度より表中のとおり、授業料が課されることとなった。ウェールズ、北アイルランドの大学でも同様の優遇措置があったが、それらも見直される方向にある。

その結果、2015年度の英国の大学の平均授業料は£8,716となっている(注12)。したがって、現状では上限内での値上げ余地は少なく、授業料収入を増加させるためには入学者を増やす以外にない。学生数の増加が質の低下をもたらした場合には、再び授業料上限額の引き上げが議論の俎上に上ってくると考えられる。



(図2) イングランド高等教育財政会議(HEFCE)予算推移(単位: 百万£) HEFCEのHPより <http://www.hefce.ac.uk/pubs/year/2015/201505/>

(図3) 英国高等教育機関の収入内訳(2013年度) HESAのHPより <https://www.hesa.ac.uk/pr/3488-press-release-213>



大学名	国内（EU出身 含）学生	国外（非EU出身）学生		
		標準	研究室利用あり	医療系学部
オックスフォード大学	9,000	21,770	28,780	32,948
ケンブリッジ大学	9,000	21,750	29,610	43,146
ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン	9,000	15,660	20,700	35,840
インペリアル・カレッジ・ロンドン	9,000	23,500	25,500-6,500	36,400
キングス・カレッジ・ロンドン	9,000	15,600	20,700	20,700
ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス	9,000	17,040	-	-
パーミンガム大学	9,000	13,195	17,145	31,000
ブリストル大学	9,000	15,200	18,300	33,900
エクセター大学	9,000	15,500	18,000	27,000
リーズ大学	9,000	13,500	17,500	28,000-30,750
マンチェスター大学	9,000	14,500	19,000	33,000
リヴァプール大学	9,000	13,400	16,800	29,950
ニューカッスル大学	9,000	12,680	16,265	30,105
ノッティンガム大学	9,000	14,140	18,210	33,340
クィーン・マリー大学	9,000	13,650	16,450	30,000
シェフィールド大学	9,000	14,500	18,750	34,000
ウォーリック大学	9,000	15,820	20,180	32,200
ヨーク大学	9,000	15,150	19,500	25,930
ダーラム大学	9,000	14,900	18,900	-
サウサンプトン大学	9,000	14,660	18,010	38,315
カーディフ大学	9,000	14,000	17,500	31,000
ベルファスト・クィーン大学	3,805※	13,280	17,035	33,170
エディンバラ大学	1,820※	15,850	20,850	47,200
グラスゴー大学	1,820※	14,500	18,200	33,000

(表1)ラッセルグループ所属大学の2015年度授業料一覧

The Complete University Guideから当センター作成

※北アイルランドに所属するベルファスト・クィーン大学、スコットランドに所属するエディンバラ大学、グラスゴー大学は、英国内の他地域出身学生に対し、自地域及びEU出身学生と異なる授業料を設定している。

### 学生ローン残高の累増

英国では、基本的に授業料は、学生個人が負担する学生ローンにより賄われている。さらに、本年7月に発表された政府予算案の中で、2016年度以降、生活維持奨学金(maintenance grants)を学生ローンへ一本化することが示された(注13)。これは、現行の学生ローンを現在より€766多い、年間最大€8,200まで支

給できるよう拡大する代わりに、給付型の生活維持奨学金を廃止するというものである。

政府による公的支援から学生ローンへのシフトは、一見すると高等教育の対価を支払う者が国民から学生個人に移行したように見える。しかし、実際には政府が立て替える形になっており、最終的に負担は国民に帰属する可能性が高い。

現行制度では、学生の卒業後の年収が€21,000を超えるまで返済が免除され、年収が€21,000を超えた場合に初めて、年収との差額の9%が返済に充てられる仕組みである。また、返済開始後30年経過した時点で、未返済分は帳消しとなる。

近年の英国経済の低迷や就職難、昇給の遅れなどにより、学生ローンの未返済残高は急増しており、2014年度末時

点で6736億に達した(注14)。学生ローンを立て替えているビジネス・イノベーション・技能省は回収不能となった学生ローンの償却のため、2015年度予算に621億を計上した。学生ローンの未返済分は将来の国民負担として重く押し加かることになる。

定員枠が撤廃されたことで、多くの大

学は学生数を増加させる方向に舵を切った。しかし、これは端緒に過ぎず、授業料上限額の引き上げや参加困難な学生の参加機会をいかに確保するかという問題が後に続く。今後、政府から、今後の高等教育の方向性を問う提案文書(いわゆる「グリーン・ペーパー」)が発表される予定である(本稿執筆時点)。

その中には、HEFCEの教育交付金の配分に影響を与える教育評価制度(TEF: Teaching Excellence Framework)の構想も含まれる。今後も本件の成り行きに注目していきたい。

(JSPS Londonアドバイザー・成瀬)

注1 “JSPS London News Letter vol.39”

[http://www.jsps.org/newsletter/JSPS\\_Newsletter39\\_Low.pdf](http://www.jsps.org/newsletter/JSPS_Newsletter39_Low.pdf)

注2 「Aレベル試験」(正式名称はThe General Certificate Education Advanced Level (GCE))は、英国の大学進学に必要な統一試験。科目毎に最高のA\*からEまでの6段階で評価される。通常、各大学は指定した3科目の成績により可否を判断し、合格にはA\*からCまでの成績が必要とされる。

注3 「コア・マージン枠」は、年間授業料の上限69,000を下回る67,500以下の授業料を設定している大学のうち、一定の質を確保している大学に、本来の定員枠とは別に、追加で学生を受け入れることを認める制度。

注4 「AAB枠」は、Aレベル試験において、A2つとB1つ以上の好成績を収めた学生を、本来の定員枠とは別に、大学が競争的に受け入れることを認める制度。2013年度には、A1つとB2つ以上の成績の学生を対象が拡大された。

注5 なお、英国でこれまで定員管理の対象になっていた学生には、EU加盟国出身者も含まれる。現在議論されている英国のEU離脱が実現すれば、EUからの学生が大幅に減少し、入学者の質が低下することが予想される。そのため、英国の大学関係者は英国のEU離脱に団結して反対している。

注6 UCAS“End of Cycle Report 2014”p65

注7 加えて、英国の18歳人口は2020年代初頭に減少に転じる見通しであり、将来的に出願者数は減少の方向にある。

注8 英国の高等教育機関が受け取る公的助成には大別すると、高等教育財政会議(HEFCs)が支出するブロック・グラント(日本の運営費交付金に相当)と各研究会議(RCs)が支出する競争的資金がある(いわゆる「デュアル・サポート・システム」)。

注9 研究交付金は、従来から4年毎の研究評価の結果により配分額が決定されている。直近は2014年の研究評価制度(REF: Research Excellence Framework)。

注10 授業料収入には非EU圏からの留学生が支払う授業料も含まれる。留学生の授業料には上限がなく、国内学生より高額に設定できるため、授業料収入を目的として留学生の受入数を増加する大学も出てきている。本年4月、北アイルランドの担当省から約6800万の予算削減を受けた注11 ラッセルグループ所属のペルファスト・クィーン大学は、人員削減に踏み切るとともに、留学生数を3倍にする目標を立てたが、地元出身学生の進学を圧迫するとして批判を浴びている。

注11 ラッセルグループは英国の有力研究型大学24校で構成する大学連合体。

注12 OFFA“Access agreements for 2016-17: key statistics and analysis”

<https://www.offa.org.uk/wp-content/uploads/2015/07/Access-agreements-for-2016-17-key-statistics-and-analysis.pdf>

注13 <https://www.gov.uk/government/news/summer-budget-2015-key-announcements>

注14 <http://www.slc.co.uk/official-statistics/student-loans-debt-and-repayment.aspx>

# 在英研究者の者窓から

## 第5回 ポーツマス大学 阪本章子



2014年、在英英日翻訳者の集い  
J-Netで研究成果を発表

Dr Akiko Sakamoto  
Lecturer in Translation Studies and Japanese Language  
School of Languages and Area Studies, University of Portsmouth

### 略歴

1991年 大阪外国語大学(現大阪大学外国語学部)ドイツ語学科卒  
日本語教師、翻訳者として日本とイギリスで勤務

2010年 英Middlesex大学 修士課程(翻訳学)修了

2013年 英Leicester大学 博士課程修了、博士(翻訳学)

英 London Metropolitan大学、Leeds大学、Leicester大学非常勤講師を経て2013年より現職

英国で研究を行っている日本人研究者の数は、JSPS Londonの在英日本人研究者(JBUK)にご登録いただいている方だけでも300名以上。そのような方々は、どのようなきっかけで渡英し、何を感じながら研究に勤しんでいらっしゃるのでしょうか。本コーナーが始まって早くも5回目。今回はポーツマス大学 阪本章子先生にご寄稿頂きました。

ポーツマス大学外国語学部でLecturerの仕事に就いて、今年で3年目に入りました。修士課程で翻訳学、学部で日本語を教えています。日本とイギリスの翻訳業界で20年近く働いたあとのキャリアチェンジは、かなり勇気のいるものでした。イギリスで博士号を取り、イギリスの大学で働くことについて、私個人の経験を少し書いてみたいと思います。

“Don't work hard. Work smart.” レスター大学博士課程の入学初日、リサーチ研修部部長の一言目がこれでした。一生懸命働くのではなく、「賢く」働く。博士課程の学生は研究者である前に、配偶者であったり、親であったりするのだから(確かに周りを見ると熟年風の学生もたくさん.....)、研究は効率的に行い、私生活も充実させなさい、という意味でした。夫と子ども二人のいる私にとっては、なんとも励みになる言葉でしたが、同時に、一

生懸命が美德の日本との文化の違いに、驚きも感じたものです。

もうひとつ印象に残った言葉は「必ず3年で論文を提出すること」。イギリスの博士課程はフルタイムの場合、ふつう3年、長くても4年です。しかも、私のように奨学金をもらった場合、国民の税金を使っているわけですから、期限延長はご法度とのこと。これは、かなりのプレッシャーでした。実際、論文提出の一月前に今の仕事を始めることになったため、一月間は論文の仕上げと授業の準備が重なり、本当に大変でした。提出を一年遅らせようかとも思ったのですが、「教える仕事が始まると研究の時間を捻出するのが難しくなるので、苦しくても、いま提出したほうがいい」との指導教官の言葉を受け、何とか期限内の提出にこぎつけました。そして今でも、このアドバイスの的確さには感謝しています。とくに人文系

は、教える授業数も多く、研究との両立が本当に難しいと感じるからです。

博士課程の3年間は、研究そのものに対する指導に加え、いろいろなトレーニングを受けることができ、短期間ながら充実した研究者修業の期間となりました。「3年間の計画の立て方」「論文の書き方」から始まって「リサーチ手法」はもちろん「研究倫理」「著作権問題」「速読法」(文献をいかにたくさん読むかは研究のカギとも言えます)など内容は様々。大学の研究者にはいろんな人がいるからでしょうか、「指導教官との付き合い方」というトレーニングまでありました。

なかでも一番印象深く、役にたったトレーニングは「プレゼンテーション法」でした。普段は政治家や事業家を相手に話し方(英語でElocution)を教えるプロのトレーナーが来て、博士課程の学生グループを相手に、発声の仕方や姿勢や

目線の使い方、緊張したときの対処法などを手取り足取り、1日みっちり教えてくれたのです。ここで学んだスキルは学会での発表や大教室でのレクチャーのときに、今でも役にたっています。

特に面白かった内容は、「効率的なネットワーキングのしかた」でした。学会での立食ランチで憧れの研究者に話しかけたい、と思ったとき、その人への近づきかた、目線の合わせ方、声のかけ方など工夫をすれば、話をするチャンスがうまく作れるとのこと。日ごろ、学会のレセプションなどに苦手意識があったのですが、こういうトレーニングがあること自体、あらゆる人たちが知らない人と話すことを苦手をしているということ。研究者としてのスキルというのは、学術面だけにとどまらないということが、よくわかったトレーニングでした。

さて、私の専門である「翻訳学」ですが、その名前を聞いてもピンと来ない人も多いと思います。日本でも最近の一部の大学で研究が活発化してきていますが、日本は昔から民間の翻訳学校が普及しており、学問としての翻訳の地位がまだ

まだ低いのも現状です。しかし英国やヨーロッパでは70年代から、文学や言語学とは独立した学術分野として「翻訳学」が確立されており、多くの大学で(ふつうは大学院レベルで)教えられています。

私の博士課程のテーマは、翻訳者のディスコース分析。プロの翻訳者が自らの翻訳手法をどのように説明するかを分析し、書籍の中の翻訳理論との違いを調べました。

現在は、ポーツマス大学の翻訳学チームで新しい研究プロジェクトを立ち上げ中です。機械翻訳、クラウドソーシング、ソーシャルメディアなど、翻訳の世界にもデジタル技術がどんどん入ってきているなか、翻訳者の労働環境の劣悪化や翻訳の質の低下などの問題が浮上しています。たとえば、インターネット上でのボランティアの翻訳者が増えてきているなか、流通する翻訳の質の問題に加え、プロの翻訳者の社会的ステータスや低賃金の問題が浮かび上がってきています。これは、従来の翻訳学が中心的に取り組んできたテキスト

分析だけでは解決できない分野の問題で、経済学、社会学、心理学などの見地が必要になってきます。また情報学で構築されている知識を、翻訳研究の面から補完するものでもあります。実際、このプロジェクトでは、翻訳業界の人々を対象にフォーカスグループディスカッションを行い、デジタル技術が翻訳にかかわる人たちに実際にどのような影響を与えているかを調べる予定です。そのうえで、従来の翻訳理論に修正が必要であるか、あたらしい理論建てが必要になるかどうかを探求してみたいと思っています。

デジタル技術と人間の共存・協働は、今の世界では普遍的な課題です。翻訳研究もこの側面を無視することは、もはやできなくなってきました。将来的には、翻訳業界にかかわるすべての人たちがデジタル技術とハッピーに共存・協働できる世界の実現に貢献することを目標に、プロジェクトを進めていければと思っています。

## • ぽりーさんの英国玉手箱 •

### Q 英国人の余暇の過ごし方(後編)

英国の人々はどのようなことをして余暇を楽しんでいるのでしょうか？  
今号では、長期休暇の過ごし方についての情報をお届けします。

**A** 前号で、余暇の過ごし方は人それぞれ、環境やライフスタイルによると述べましたが、長期休暇の過ごし方についても同じことが言えます。特に、どのぐらいの予算をあてられるのか、個々の経済的な事情が大きく反映するのは、日本のみならず英国でも同じです。

一般的には、会社や組織から与えられる有給休暇をめいっぱい使ってどこかに旅行に行く、というのが最もよくあるパターンではないかと思います。旅行の行き先としては、一年を通してギリシャやスペインなどの地中海沿岸部が人気です。というのも、英国では年間を通して日照時間が少なく夏でも海の水は冷たいので、英

国人にとっては、ビーチで優雅に日光浴をしたり、海水浴を楽しんだりするのはとても貴重な時間なのです。旅行会社によるパッケージツアーを利用する人もたくさんいます。国内旅行では、英国で最も温順な気候のイングランド南部が人気です。

もちろん活動的な長期休暇の過ごし方を好む人もいて、私もその一人です。私は、数年前に、全て自分で手配してマダガスカルに旅行に行きましたが、そこで得た素晴らしい経験の数々は今でも鮮明に記憶に残っており、そういった特別な思い出は何にも代え難いものがあります。



## スタッフが見た英国

日本ラグビーが世界に名を轟かせた日 by Naoko Nishizawa



ラグビーW杯2015、南アフリカ対日本戦(ブライトン)。J・K・ローリングをして「You couldn't write this...」と言わしめた、誰も想像することすらできなかった劇的な幕切れで大金星を挙げた日本チーム。

技も力も速さも全てが最高の南アに、小刻みな得点で地道にそして粘り強く食らいついていき、最後に逆転トライを決めて勝利をものにした瞬間、息を詰めて総立ちで見守っていたスタジアム全体が蜂の巣をつついたような大騒ぎとなった。

スポーツ史上に残る名一番となったこの試合は、4年後のW杯日本開催を大きく盛り上げるものとなるだろう。

Japan Matsuri 2015 @Trafalgar Square by Masaya Naruse

9月19日(土)にロンドンのトラファルガー広場で開催された「ジャパン祭り2015」の様子。

普段はロンドン観光の中心となるこの広場も、この日は日本食の屋台や和太鼓の演舞を見に集まった人々で溢れた。

薩摩藩の留学生が渡英して150周年を迎える今年、日本を身近に感じる1日となった。



## | Recent Activities

### JSPS London Symposium Scheme

#### Loch Lomond Symposium on Action Anticipation

University of Strathclyde

Wednesday 2nd – Friday 4th September 2015

JSPS London supports JSPS Alumni members holding Japan-UK symposium.

Dr Jonathan Delafield-Butt, senior lecturer of University of Strathclyde, Organizer of this symposium supported by JSPS London reports the long history of Japan-UK collaboration and its flourishing outcomes.



Symposium speakers

This unique conference examined the role of action anticipation in child development, learning, and health. It was supported jointly by JSPS London and the University of Strathclyde, and had some historic resonance of a personal, as well as scientific, nature. Forty years ago, a similar meeting was held at Ross Priory. It was attended by a young lecturer, then just beginning his career at the University of Edinburgh in child psychology, Dr. Colwyn Trevarthen. Together with colleagues Prof. Jerome Bruner from Harvard and Dr Daniel Stern from New York, the conference discussed the role of non-verbal communication in infant and child development, and the book published from the meeting became something of a classic in the field.

All three scientists challenged the status quo in developmental psychology, questioning the importance of agency and emotion in infant development, claiming it was significant and important

for developmental health when the fields of psychology and paediatrics had dismissed such early communication as psychologically invalid. All three individuals eventually won the argument, and we are seeing the results of their work today in improved clinical care for infants, improved early years policy in education and social support, and improved techniques of medical practice that attend to the child as an emotional and purposeful individual. Prof. Trevarthen is now regarded as the most highly cited psychologist in the United Kingdom; Prof. Jerome Bruner, who turns 100 this year, is cited as one of the 20th Century's most influential psychologists; and Prof. Daniel Stern bridged psychiatry, paediatrics, and psychology to establish the growing field of infant mental health.

The book that this meeting produced came into the hands of a young primate researcher in Japan interested in parent-infant behavioural patterns and their

importance in learning, a young Dr. Koichi Negayama, the scientific lead on the Japanese side for our symposium. Dr. Negayama – now Prof. Negayama – had become interested in human development and the book impressed him with its view of psychological/behavioural development as active, participatory, and emotional from the beginning of life, conveying meaning and sharing feeling through the structure of body movement, a view shared with ethology. Inspired by this new perspective in psychology, Dr. Negayama contacted Dr. Trevarthen and came to Scotland some time later for two productive sabbatical research programmes.

Fittingly, Prof. Negayama opened the JSPS Loch Lomond Symposium on Action Anticipation this year with his personal account of this cycle of connection. He recalled how it was the book produced at this place forty years ago that brought

## |Recent Activities

him to Prof. Trevarthen, how it was Prof. Trevarthen who, some years later, brought him to Dr. Jonathan Delafield-Butt for his third sabbatical in Scotland, in 2010. And how it was through our collaboration for shared research that brought him to Ross Priory, where the work first began.

T.S. Elliot's famous verse, "We shall not cease from exploration, and the end of all our exploring will be to arrive where we started, and know the place for the first time," speaks to us of the dialectic of scientific discourse, a journey of discovery that returns us to where we begin, now enriched with new knowledge and depth of understanding. In the recursive discourse of child psychology, Ross Priory plays a role. But the end is not yet in sight. We trace and re-trace familiar paths, not only in our academic re-working of ideas with new data and in re-presenting familiar ideas in new ways, but in the people and places we interact with who help us to make the knowledge we create, together. The cyclic nature of learning, a repetition of successful acts, brings joy and satisfaction along with new knowledge and new understanding. It is why many of us do research, for the love of knowledge and the joy in its process of discovery.

This JSPS symposium, planned by Dr. Jonathan Delafield-Butt and Prof. Koichi Negayama together with valuable

advance from Prof. Vasudevi Reddy, set out to advance the state-of-the-art in child development, with focus to action anticipation as a key element in a child's sense of agency, in interaction with others in learning, and in adaptation to cultural practices. It brought together select researchers from Japan and the UK in order spearhead new collaborative efforts between participants and to generate research synergy in this multidisciplinary field.

The symposium was held at the Ross Priory, a beautiful estate on the shores of Loch Lomond dating back to the 17th Century and a unique University of Strathclyde conference facility. Here in the tranquillity of the Scottish Highlands and away from the distractions of a busy life, researchers from psychology, anthropology, education, medicine, and neuroscience – from across the UK, Japan, and Europe – were able to find the time and space needed to benefit from each others' disciplines and research, and to bridge cultures for a shared, cross-disciplinary understanding of this fundamental topic. I am happy to report we did so with some success. Twenty-five participants and speakers met for two days of intensive talks, with a third day given to private discussion between invited speakers to share work-in-progress and so afford opportunities to collaborate on ongoing research interests and energies. The symposium

proceeded with each speaker delivering a 30 minute talk, followed by 15 minutes for open discussion. Each paper was examined in depth to recognise overlaps between interests and generate cross-disciplinary fertilization.

Fitting the moment, Prof. Trevarthen (Edinburgh) opened the symposium with an overview of his 40+ years of research on action anticipation in infancy, giving a view of the child as an active, participatory agent. He was followed by Prof. Dave Lee (Edinburgh), whose mathematical model of prospective perception-action set a framework for motor analysis. Prof. Becchio (Turin) spoke of her work on intentional movement in foetal development, and its disruption in children with autism. Prof. Takeshita (Shiga Prefecture) presented her important work on chimpanzee and human differences in development of intentional movement, citing evidence from brain growth measures as important differentiators. Finally, Dr. Nagy (Dundee) concluded the day with new data on foetal and early neonatal intentional communication.

The second day opened with Prof. Negayama (Waseda; Japanese Scientific Lead) presenting his work on cultural differences of action anticipation and social understanding in infant-parent engagement patterns in Japan, United States, and Scotland, including new work from our collaboration. This was

## |Recent Activities

followed by mathematical analysis from Prof. Momose (Waseda) on the sequential structure of mother-infant play patterns. Prof. Kishimoto (Sacred Heart) spoke of the role of dietic gesture in pre-linguistic communication, followed by two special doctoral presentations on early social understanding, by Ms. Rossmannith (Portsmouth) and Mr. Reichelt (Queens) on book sharing and sharing eye gaze, respectively. Next, Dr. Katori (Keio) shared data on the role of anticipation in clinical cases of prematurely born infants and infants whose mothers were distressed showing how attention here can improve mental and physiological health, followed by Prof. Takada's eloquent demonstration of early child-child cultural development in the !Xun tribe of north-central Namibia. This penultimate talk shed light on Prof. Vasu Reddy's work on enculturation of infants

in early parent-infant interactions in India and the UK. Prof. Reddy (Portsmouth, Organising Committee) concluded the symposium with her exposition on the topic, and its current role in psychological research globally.

Altogether, this meeting proved a fruitful re-union with colleagues and a special opportunity to meet new ones. I was fortunate to have had the opportunity to meet many of the invited speakers during a JSPS Invitation Fellowship to Japan in 2013, on the back of which Prof Negayama and I gave some thought to bring this group of scientists and scholars from Japan and the UK together, with their complementary knowledge and expertise. We generated some research synergies between us and the final day of work-in-progress discussion gave opportunity to learn about where the field is moving to, and so where new collaborations could be

made. In our next steps, several UK colleagues will be going to Japan for research and conference visits next year. Prof. Trevarthen is in discussion with Dr. Katori on analysis of clinical cases and Prof. Reddy will visit with Prof. Negayama and Prof. Takada in Japan. Prof. Negayama and I now enter a new phase in our research programme, and Prof. Takeshita and I aim to begin new work.

The work continues, now strengthened by this opportunity to share ideas, knowledge, and expertise, between warm friends and colleagues, altogether with a common purpose to understand early childhood, and therefore to enable the best professional care possible. I would like to thank JSPS and JSPS London for their support, without which this enriched dialogue and continued growth in child development between Japan and the UK would not have been possible.



Lecture



Ross Priory with stunning views of Loch Lomond (University of Strathclyde)



## | Recent Activities

JSPS London Symposium Scheme

### Deconstructing Boundaries: Is 'East Asian Art History' possible?

School of Oriental and African Studies(SOAS),  
University of London  
Saturday 10th – Sunday 11th October 2015

JSPS London supports JBUK ( Japanese Researchers based in the UK ) members holding symposiums to promote Japan-UK research collaboration. As Organizer, Dr Eriko Tomizawa-Kay, Lecturer of University of East Anglia reports the symposium with challenging perspectives based on Japan-UK research collaboration.



Symposium speakers

The aim of this symposium was to give insight into the changing boundaries and concepts of 'art' in Japan and East Asia. We have especially hoped to illuminate the exchanges and dialogues that took place among the artists of Japan and other East Asian nations.

The birth of East Asian art history could not have occurred without the symbiotic relationships among various groups of artists. Papers have challenged the existing geographic, temporal, and generic paradigms that currently frame the art history of East Asia. What was the relationship between artistic production and political discourse? What role did abiding cultural legacies play in the artistic development of East Asia at large? At this conference, the discussions regarding deconstructing the boundaries

of East Asian art was expanded to include scholars from Chinese and Korean art history.

This symposium should be identified as, not only the second phase of the previous June 2013 'International Modern Japanese Art History Symposium – New Boundaries in the Study of Modern Japanese Art: Extending Geographical, Temporal and Generic Paradigms' – generously supported by JSPS London - but also as a further development of study with the key theme, 'Deconstructing Boundaries in East Asian Art and Japanese Art History'. In the previous conference, held in 2013, around 150 people attended over the course of the two-day event, including leading Japanese art historians with a broad area of expertise, and in particular

with a fresh approach to art history in terms of modern methodology and historiography.

The symposium offered three key themes: Constructing the idea of East Asian Art in Japan; Japanese Academies as a Centre; and War and Body, presented by a total of sixteen speakers including five keynote speakers from Japan.

This symposium was expected not only to enhance the awareness of East Asian Art studies from the global point of view, but also strongly to promote study and research for young scholars and students in Japan.

Therefore, three representative Ph.D. candidates from Japan presented papers along with prominent scholars.

Both senior and junior scholars

## |Recent Activities

presented their research in order to stimulate the development of further studies in the area. The participants have had various backgrounds, such as Japanese art history, Korean art history, and Chinese art history.

Through the two-day conference in 2015, questions relating to methodology in (re)constructing a broad history of East Asian art had also been addressed in this symposium. A wide range of backgrounds were represented in the audiences, not only people with East Asian and European Art history backgrounds, but also contemporary artists, art critics, sociologist, and international relations; furthermore

people gathered together from East Asia, the United States, and Europe, and exchanged and shared their ideas during the discussion time and built new scholarly networks during the symposium.

This symposium attracted a wide range of scholars who have been not only interested in Japanese art but also the relationship with East Asian art history, and also the new framework of 'East Asian Art' and the definition of 'Art History.' Moreover, the symposium speakers have shown a completely new way in which to see and analyse Japanese Art History to people that are engaged in Japanese studies in Europe,

as well as to stimulate audiences with the newest topics in Japanese art history. The presentations and exchange of information about research topics have given a rare and important opportunity for, in particular, young scholars to create tight relationships in the near-future, and to develop intellectual communications beyond countries and their study areas.

After successfully completing this symposium, the anthology by speakers will be published during FY2017.



Lecture



Q&A session

### JSPS Open Partnership Joint Research Project “Japan-Italy-UK Mini-workshop on Amyloidosis”

University College London

Monday 28th – Wednesday 30th September  
2015

Prof Hironobu Naiki, University of Fukui, Japanese Team Leader of the project reports the kick-off meeting for the newly funded JSPS Joint Research Project, showing project's future direction based on his strong collaboration with Europe and the next generation's passion.



On 28th to 30th September, 2015, we visited London to hold the “Japan-Italy-UK: Mini-workshop on Amyloidosis” at the UCL Royal Free Campus. Our visit to London was supported by the JSPS Joint Research Project “Molecular pathogenesis of human amyloidosis revealed by the synergistic interaction of protein science and animal models”. This project is part of our international collaborative work with Professor Vittorio Bellotti of UCL.

Our history of interaction and friendship started more than ten years ago. On December, 2004, the 1st Italian-Japanese Workshop “Dialysis-related amyloidosis: from molecular mechanisms to therapies” was held in Pavia, Italy, organized by Professors Vittorio Bellotti, Rino Esposito and Yuji Goto, who all again took part in this mini-workshop. Many Japanese investigators including myself attended the Pavia workshop. Ten years later, Japan-Hungary Seminar “Mechanism and regulation of aberrant protein aggregation” was held on November, 2014, in Osaka, Japan, organized by Professors József Kardos and Yuji Goto. Professor Bellotti and I also attended this seminar. The bilateral Workshop and

Seminar were supported by JSPS Joint Seminar Programs. Before the Seminar, Professor Bellotti and I started collaborative work about the effect of extracellular chaperones to the amyloid fibril formation. I visited London four times during the last two years for the discussion with his team and this became my fifth trip to London. Last March, Professor Bellotti and I visited JSPS London office, where Ms. Polly Watson, International Programme Coordinator, kindly explained how to apply for the JSPS Joint Research Project and encouraged us to put our full passion and enthusiasm to the grant proposal. Thus, I described enthusiastically all of our history and future prospects in our grant proposal. Fortunately, our proposal was accepted in May and we could make this visit to London.

One of the purposes of this visit, and our JSPS grant proposal was to give young investigators the opportunity to present their data and to exchange valuable information with foreign investigators. Thus, many young investigators from Japan, UK, and Italy presented their ongoing, fresh data in this seminar. In a relaxed, completely

informal atmosphere, we could enjoy thorough, constructive discussion together. At the round table session Tuesday morning, we thoroughly discussed the future perspective of our collaboration and the possibility of applying for the big international grant together. Remarkably, at the conclusive remark session in the Wednesday's morning, young participants first discussed the summary of this workshop and future plans of our collaboration without the accompaniment of old professors, then presented their proposal to the old professors. Their proposal was fresh, enthusiastic and full of inspiration, which was enough to convince the old professors that they will be developing the new horizon of amyloid science by themselves. This workshop will add an unforgettable new page to the interaction and friendship of all the participants and will be our scientific inspiration forever.

Finally, we sincerely thank Professor Kunio Takeyasu, the Director of JSPS London office for giving us a speech at the opening session and all of JSPS staff for their continuous support of our interaction and friendship.

## | Recent Activities

### JSPS Core-to-Core Program

#### The official kick-off meeting of “A Consortium to Exploit Photon and Electron Chirality in Advanced Materials”

University of Glasgow

Sunday 11th – Tuesday 13th October 2015

Prof Robert Stamps, University of Glasgow, UK Coordinator of the Programme, Dr Donald MaClaren, University of Glasgow, and Dr Yoshihiko Togawa, Associate Professor of Osaka Prefecture University as well as Honorary Research Fellow of University of Glasgow, organizing committee members of the meeting report the enthusiastic atmosphere of the kick-off meeting for the newly funded JSPS Core-to-Core Program.



kick-off meeting participants

The official kick-off meeting of “A Consortium to Exploit Photon and Electron Chirality in Advanced Materials” was held on 11-13 October, 2015, on the campus of the University of Glasgow. The consortium is funded by a collaborative award that is co-sponsored by JSPS and the Engineering and Physical Sciences Research Council (EPSRC) of the UK. It is led by a triumvirate of Prof. Katsuya Inoue at Hiroshima University, Japan, Prof. Alexander S. Ovchinnikov of the Ural Federal University, Russia, and Prof. Robert L. Stamps of the University of Glasgow, UK. Members are mainly drawn from these three countries but the consortium has already expanded to include researchers from Australia, Spain, France, and Canada. One of our aspirations for the next five years is to use the new transnational and

multidisciplinary collaborations of the consortium to explore a novel research field, driving us towards innovative solutions to research challenges.

There were 38 participants at the meeting, with 17 from Japan, 16 from the UK, 3 from Spain, and 2 from the USA. Highlights included invited talks by the JSPS London director Kunio Takeyasu, Simon Crook (Senior Physical Sciences Manager, EPSRC), Prof. Laurence Barron FRS FRSE, Prof. Kannan Krishnan of the University of Washington, Prof. Alexander Govorov (Ohio University), and Dr. Paolo Vavassori (CIC nanoGUNE, San Sebastian). Eighteen PhD students and young post-doctoral researchers contributed to the meeting and led a lively poster session.

Our choice of venue is auspicious. The term “chirality”, which is the

consortium’s core theme, was originally coined by Lord Kelvin of the University of Glasgow in 1889. 100 years later, the term was refined to include the concept of dynamics by Prof. L. B. Barron, also of Glasgow University. We were therefore glad to formally launch the Core to Core programme in the “Mecca” of chirality research, and particularly honoured to have Prof. Barron, a pioneer in the field, attend.

The meeting’s research programme was carefully balanced to leave time for participants to talk each other and brainstorm research ideas. It consisted of four sessions: a series of short talks to introduce and share ideas and difficult problems; a poster session for PhD students and young post-doctoral researchers to showcase their research activities; an invigorating brainstorming

## |Recent Activities

session that sought to identify our immediate research goals and long standing challenges; and evening sessions that extended the research discussions in a relaxed style. An immediate outcome is the decision to use our discussions to write a collaborative “roadmap for chirality science” publication that will help to define the main challenges (and possible solutions) in chiral materials science.

We are advised by Prof. K. Takeyasu to manage the Core to Core program so that each core institution contributes to the research activities equally, thereby improving the prospects for mutually-beneficial international collaborations. In this regard, we believe that our consortium is very promising because: (1) almost half of participants are PhD students and young post-doctoral researchers; (2) these researchers were very active in the brainstorming session; and (3) some of them are already advancing their research projects by working across three core institutions. To conclude this essay, we would like to show their feelings of the meeting. For our fruitful collaborations, Sláinte!

### Comments from participants:

●**Mr. Yusuke Masaki** (PhD student, University of Tokyo, doing theoretical works at the University of Glasgow for these six months)

“I heard about a lot of open questions and outlooks in most of talks and understood the latest trend in each research area and felt like the collaborations are about to be kicked off and launched now.”

●**Mr. Shun Hashiyada** (PhD student, Institute of Molecular Science, doing experiments together with the University of Glasgow since last year)

“I recognised again that there are some barriers between chiral optics and magnetism in terms of characteristic scales of temperature and time. But I was inspired a lot by talks given by energetic speakers who are leading each research area. This is when we could start new interesting collaborations over such boundaries.”

●**Dr. Francisco Gancalves**, who joins the core-to-core project as a post-doctoral researcher in Hiroshima & Osaka Pref. University, just after getting PhD at the University of Glasgow.)

“This meeting gave me the chance to initiate a whole new network of collaborators among some of the most advanced research facilities in Japan and the UK. I'm really looking forward to move to and continue my research in Japan.”

●**Dr. Igor Proskurin**, who moved from Russia to Japan and has been doing research as a PhD researcher in Japan for more than three years.

“The kick-off meeting took place in the inspiring atmosphere of the University of Glasgow where the term "chirality" was originally coined by Lord Kelvin. I wish we should develop and promote the format of Round Table topic discussions which seems to be quite effective for generating and exchanging new ideas.”

●**Prof. Barron**, the leading architect of our modern day understanding of material chirality, summarised the science discussed at the meeting as follows:“Chirality is the quintessential cross-disciplinary subject, and I'm sure Lord Kelvin would have approved of this combination of world-leading expertise from the Schools of Physics and Astronomy and Chemistry, together with distinguished international collaborators, to develop new fundamental insights and practical applications, especially those based on the subtle interplay of chirality and magnetism, the exciting potential of which remains largely untapped.”

## | Recent Activities

Pre information event for JSPS fellows

### Pre Departure Seminar and Alumni Evening

JSPS London

Wednesday 28h October 2015

A seminar combining information about JSPS funding opportunities and preparations for a research trip to Japan was organised by JSPS London. Participants included recent awardees of several types of JSPS Fellowships to help them prepare for their upcoming research visits to Japan.



Participants of networking reception

The seminar started with welcoming remarks from the Director of JSPS London, Professor Kunio Takeyasu. This was followed by a short self-introduction by each participant so similar areas of research and institutions being visited in Japan could be linked. In this group our fellows will be visiting a varied array of departments at universities and research top institutions all over Japan. From the Department of Regenerative Medicine and Biomedical Engineering, Saga University in the south to the International Research Institute of Disaster Science at Tohoku University in northern Japan. The seminar was presided over by Ms. Polly Watson, International Programme Coordinator of JSPS London, who at first explained the purpose of the event and about the

different presentations that were to follow. The first presentation by Ms. Chigusa Ogaya, Deputy Director of JSPS London, gave an essential introduction to JSPS, the preparation JSPS researchers need to make and kinds of assistance available from JSPS. This was followed by a presentation from Mr. Takafumi Okada, International Programme Associate. He explained about the various funding opportunities seminar participants can be involved in on their return to the UK as ways to further develop their academic links in Japan. These include the JSPS international programmes at an individual, departmental and institutional level as well as the funding schemes of the UK & Rol JSPS Alumni Association. Dr. John Brazier, a JSPS Alumnus based at the University of Reading, spoke next about

his experiences of research environments and living in Japan. He gave very thoughtful and practical advice about getting the most out of a JSPS Fellowship and how he has used the experience to advance his career on return to the UK. Dr. Brazier's presentation covered a wide range of topics from Japanese customs, mobile phones and budget airlines for domestic travel to the atmosphere of research environments in Japanese research institutions and building networks with Japanese counterparts. The purpose of this presentation was to put to rest any anxieties and to get the new JSPS fellows looking forward to going to Japan. JSPS London was also pleased to have in attendance a guest speaker from the Daiwa Anglo-Japanese Foundation, Ms. Susan Meehan, to make

## |Recent Activities

seminar participants aware about further funding opportunities this distinguished organisation offers to do research in Japan. The presentations were followed by a Q+A to formally discuss any pre departure issues the seminar participants were experiencing.

After the pre-departure seminar, the UK & RoI JSPS Alumni Association held an alumni evening for networking among members and new JSPS fellows in a

relaxed atmosphere. The evening started with an award ceremony for Alumni granted in FY2015 either a BRIDGE Fellowship that supports short research trips to Japan or the Symposium Scheme award that supports a UK-Japan academic event at institutional level. During the ceremony, each awardee was invited to comment on their achievements made using one of these sources of funding and received a

congratulatory certificate and gift. In FY2015, 5 BRIDGE Fellowship and 5 Symposium Scheme awards were made.

The award ceremony was followed by a drinks reception and buffet to allow for networking and the chance for further information exchange between new fellows and Alumni in preparation for their trips to Japan.



Opening of the pre departure seminar from Professor Kunio Takeyasu, Director of JSPS London



“Experiences as a JSPS Fellow,” presentation from Dr. John Brazier, University of Reading



Dr. Gorana Pobric, University of Manchester making an acceptance speech for a JSPS BRIDGE Fellowship during award ceremony



Participants expanding their researchers’ networks

## | Recent Activities

### Comments from attendees:

● **Dr. Ana Verissimo (University of Leicester), Short Term Pre/Postdoctoral Fellow**

“This event provided a great opportunity to meet JSPS staff and previous fellows, who gave insights into life in Japan as well as what they did next, and were available for discussion and questions. It was also very good to hear about the advantages of becoming JSPS alumni and what further support JSPS has to offer. Attending the event prepares us for both visiting Japan and for starting to plan what to do next upon our return.”

● **Mr. Max Lau (University of Oxford), Short Term Pre/Postdoctoral Fellowship**

“The Pre-Departure Seminar and Reception presented everything that a British academic venturing to Japan for the first time would want to know. Whether in formal Q&A or through casual chats over sushi and a beer, abstract knowledge that I was going to Tokyo for a year became a more confident reality as everything from the complexities of opening a Japanese bank account to surfing and skiing at the weekend were covered. As well as meeting others going out there this year, finding that once you were part of the JSPS you were part of the community for life as an alumni member was a pleasure to learn.”

● **Dr. Cornelia Lawson (University of Cambridge)**

“Although I’ve lived in Japan before, the event gave me the opportunity to find out new information about living in Japan and about JSPS itself. It was also valuable and fun to meet everyone at JSPS and the other fellows, and especially to see the wide range of topics being supported.”

● **Dr. Tom Ducat (University of Warwick), Standard Term Postdoctoral Fellowship**

“The JSPS Pre-departure Seminar provided an excellent occasion to learn more about moving to Japan. It helped me to think through some aspects of moving that I may not have otherwise considered and also to discover more about my future opportunities, both during my time in Japan and after. Combined with the Alumni evening, there were also excellent chances to speak to previous JSPS fellows and to gain from their past experiences.”

● **Professor Wuqiang Yang (University of Manchester), Short Term Invitation Fellowship**

“The Pre-departure Seminar and Alumni evening held by the JSPS London Office was well organised. The members of staff in the JSPS London office were very friendly. The event was very informative, from covering topics such as travelling, accommodation, opening a bank account, health insurance, to Japanese culture and seasonal attractions. Dr John Brazier’s talk in particular imparted a lot of very good information on these things. His experience both in Japan and after he completed his Fellowship was very useful to know. In addition, the event provided us an opportunity to get to know other Fellows before going to Japan. Overall, this event was excellent.”





Professors Shigeru Kinoshita, Andrew Quantock, and Noriko Koizumi (left to right) relaxing at a Kyoto-Cardiff joint BBQ one evening at the ARVO (Association for Research in Vision and Ophthalmology) annual meeting in the USA

### Prof. Andrew Quantock

Professor of the School of Optometry and Vision Sciences in the College of Biomedical and Life Sciences, Cardiff University, Wales, UK

#### Biography

- 1987-1992- Open University Oxford Research Unit, Oxford, UK Research Assistant: Biophysics Group
- 1992-1996- Saint Louis University School of Medicine, St. Louis, USA. Research Associate: Department of Ophthalmology
- 1996-1999 - Kyoto Prefectural University of Medicine Kyoto, Japan Research Associate: Department of Ophthalmology
- 1999-2004- Cardiff University, Cardiff, UK Lecturer: School of Optometry and Vision Sciences
- 2004-2009- Cardiff University, Cardiff, UK Senior Lecturer: School of Optometry and Vision Sciences
- 2009-present-Cardiff University, Cardiff, UK Professor: School of Optometry and Vision Sciences

#### JSPS Concerning

- 2000 JSPS Invitation Fellowship
- 2009 JSPS FURUSATO Award
- 2011 JSPS Symposium Scheme

**JSPS Alumni Association of the UK & ROI (Republic of Ireland) and JSPS London strongly encourage you to join our Alumni after your JSPS fellowships.**

**This corner provides you with Alumni member's experience thorough JSPS Fellowships and how they continue and expand their research network now.**

I suppose that mine is not a typical story of how JSPS-funded UK-Japan collaboration is usually initiated. After all, it all started when I met a man in Disneyland. To be more specific we met at the Walt Disney Swan Resort in Orlando, which was where the World Cornea Congress was held in the mid-1990s. And the man in question was Professor Shigeru Kinoshita, a co-organiser of the event. Prof Kinoshita was and still is a highly influential and respected corneal surgeon and clinician-scientist whose motto is "be international". At the time, I was a youngish researcher from the UK, a few years into my second postdoctoral position at St Louis University in the USA.

In the lab in St Louis working jointly on projects alongside me on laser-tissue interactions and new ways of conducting corneal laser surgery was Dr Mitsutoshi Ito, a PhD candidate of Prof Kinoshita's in the Department of Ophthalmology, Kyoto Prefectural University of Medicine. It was Mitsutoshi who suggested that I consider a post-doctoral position in Kyoto and arranged for me to meet Prof Kinoshita at the Congress. At the time I knew nothing of Japan, but was open to new challenges, and Prof Kinoshita was obviously keen to pursue the internationalisation of the department he had become chairman of a few years previously. The meeting happened in a corridor and negotiations were

exhaustive:

"I hear you would like to come to Kyoto?"

"Yes"

"Are you serious about it?"

"Yes"

"OK, I can bring you".

So, in April 1996 I arrived in Kyoto and was installed in a tatami-matted apartment, beautifully situated just next to the Kamo river, a lovely a ten minute walk to the university. I immediately felt very welcome in the department, and simultaneously felt some pride at being the first foreign researcher to work there. Soon after my arrival the work ethic in the university jumped out at me (and gently shook me around a little). Unlike

anything I'd experienced previously in the UK or US, the labs were commonly populated by researchers late into the evening. But the atmosphere during those times was not one of a desperate rush to meet an occasional deadline with which I was familiar, but was invariably convivial and more often than not sushi, okonomiyaki, or noodle soup -- ramen, udon or soba -- was delivered to the central office area from local restaurants for a shared dinner and as a break from the lab work or manuscript writing. This allusion of a shared experience is purposeful, and it quickly became apparent to me how strong the group ethic in Japan was. I am minded of this when I recall how I once expressed naïve concern to Prof Kinoshita when a group of about a dozen staff were eating at a small, speciality restaurant which only sells fugu, or pufferfish as it is known in the West. Parts of this fish are poisonous and the chefs are highly skilled. But my silly worries were smoothly allayed by Prof Kinoshita, "It's OK, if you die we all die": Now that's a group ethic!

My time in Kyoto was productive scientifically and I was able to work on a number of projects in the fields of corneal biology, pathology and tissue engineering. I was particularly fortunate

to get involved with research that involved growing corneal epithelial cells into monolayers which could then be transplanted onto the cornea to cure loss of vision caused by ocular surface disease or injury. Nowadays this technique is used in numerous specialised medical centres worldwide, but its success is based on the pioneering work conducted in Kyoto, and some other centres, in the late 1990s. Indeed, the lasting influence of that research is evidenced by the fact that three publications in 2000 (Koizumi et al., *Current Eye Research* 2000;20:173-177<sup>1</sup>, *Cornea* 2000;19:65-71<sup>2</sup>, and *Investigative Ophthalmology and Visual Science* 2000;41:2506-2513)<sup>3</sup> have been cited over 1,000 times, which is fairly impressive for the eye field.

To punctuate the high industry and achievements of the researchers I worked alongside, I was delighted to find that numerous department parties and dinners were organised to celebrate various events. It was the norm for everyone to attend and mix and mingle, all the way from the most senior academic to the most junior of new staff. These events were hugely enjoyable and promoted excellent bonding, and I would like to think that if there is any

justice in the world my numerous and melodious karaoke renditions of Tom Jones' "Green Green Grass of Home" will be warmly remembered or coldly forgotten. After two and a half very happy years in Kyoto I secured a faculty position in Cardiff University, near my hometown in Wales, UK, and took this up in 1999. But, magnificently, the bonds forged in Kyoto remain and collaborations have blossomed in the years since I left. And this is where the JSPS came in, providing tremendous support via its wide range of schemes at all levels of academia. I have benefited hugely from funding to cement and strengthen research links with my colleagues in Kyoto and Osaka, and several talented young British scientists have undertaken cornea research placements in Japan funded by JSPS-London. In all cases this has hugely benefitted both the careers and life experiences of those who have been successful in obtaining funding. And those individuals who have obtained JSPS-London support can be confident that they have done so through what is a robust and competitive selection process.

When I look back and reflect, it is clear that my time in Kyoto represents the

- 
1. Noriko Koizumia, Tsutomu Inatomi, Chie Sotozonoa, Nigel J. Fullwooda, Andrew J. Quantock & Shigeru Kinoshita. Growth factor mRNA and protein in preserved human amniotic membrane. *Current Eye Research* 2000;20:173-177
  2. Noriko Koizumi, Tsutomu Inatomi, Andrew J. Quantock, Nigel J. Fullwood, Atsuyoshi Dota, Shigeru Kinoshita. Amniotic Membrane as a Substrate for Cultivating Limbal Corneal Epithelial Cells for Autologous Transplantation in Rabbits. *Cornea* 2000;19:65-71
  3. Noriko Koizumi, Nigel J. Fullwood, George Bairaktaris, Tsutomu Inatomi, Shigeru Kinoshita, Andrew J. Quantock. Cultivation of Corneal Epithelial Cells on Intact and Denuded Human Amniotic Membrane. *Investigative Ophthalmology and Visual Science* 2000;41:2506-2513

single most pivotal experience of my academic career. When I arrived in Kyoto in 1996 I was assigned some desk space about a metre wide in a short row of adjoined desks facing a wall with a bookshelf behind. Either side of me, each with a glorious metre of their own, were Noriko Koizumi and Kohji Nishida. Noriko is now Professor of Biomedical Engineering and Head of Faculty at Doshisha University in Kyoto. Kohji is Professor and Chairman of the Department of Ophthalmology at Osaka University. Both, therefore, are hugely influential figures who emerged from Prof Kinoshita's department in the late 1990s, and that they make me feel like the underachiever from that row of three chairs in three meters goes without saying! But, magnificently we all continue to work and publish together.

Indeed, a grant from JSPS-Tokyo awarded to Prof Kinoshita has allowed the placement in Cardiff University of a number of highly talented vision scientists. A JSPS-London Symposium Grant in 2011 enabled us to hold a very successful meeting in Cardiff, which brought together numerous corneal scientists from across the UK and Japan. Working together over the years has led to a great exchange of ideas as well as lots of highly enjoyable scientific and non-scientific discourse. It has also resulted in more tangible outcomes such as numerous joint papers and other forms of recognition. For example, since 2009, Prof Kinoshita has been a Cardiff University Honorary Distinguished Professor at the invitation of the University's Vice Chancellor and I am Visiting Professor at Kyoto Prefectural

University of Medicine. Moreover, in 2013 I was awarded the Cardiff University Celebrating Excellence award for International Activities with Japan, and in 2004 we (Prof Shigeru Kinoshita, Prof Noriko Koizumi, Dr Nigel Fullwood (Lancaster University) and me) were fortunate enough to be awarded the prestigious Daiwa Adrian Prize for excellence in Anglo-Japanese research. Without the help and support of the JSPS none of this would have happened. So hats-off to the organisation. JSPS-London, in all its activities, is an absolutely essential facilitator of scientific research conducted between the UK and Japan, and crucially has been highly influential in enhancing the lives and careers of many researchers, myself included.



Eye Researchers at Cardiff Castle. Left-to right. Yuji Tanaka, Mayumi Yamamoto, Keith Meek, Noriko Koizumi, Andrew Quantock, Naoki Okumura.

## JSPS Fellowship Programmes

\*These application periods are for the head of the host institution to submit applications to JSPS Tokyo; the time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers.

### ◆ Postdoctoral Fellowship Programmes (Short-term/ Standard/ Pathway)

#### Short-term for North American and European Researchers

Call for FY2016 (2nd Recruitment)

Duration: 1 to 12 months

Application Period: 4- 8, Jan 2016

Commencement: 1, Jul 2016– 31, Mar 2017

<http://www.jsp.go.jp/english/e-fellow/application.html>

\*JSPS London also receives applications for Postdoctoral Fellowship (Short-term) twice a year, usually in June and December.

Applications need to be sent JSPS London DIRECTLY.

Application deadline: 1, Dec 2015

Commencement: 1, May 2016 – 31, Mar 2017

<http://www.jsp.org/funding/2015/10/the-jsp-london-call-for-the-pre-post-doctoral-fellowship-for-foreign-researchers-short-term.html>

#### Standard

Call for FY2016 (2nd Recruitment)

Duration: 12 to 24 months

Application Period: 26, Apr 2016- 6, May 2016

Commencement: 1, Sep 2016– 30, Nov 2016

<http://www.jsp.go.jp/english/e-fellow/application.html>

\*JSPS also receives applications for Standard fellowship through nominating authorities in the UK. For information on the application procedure, please contact directly the nominating authorities which are **British Academy** (for all fields of the humanities and social sciences/ application deadline: GMT17:00,

9, Dec 2015) and **Royal Society** (for the natural and physical sciences/ application deadline: February, TBC).

BA: <http://www.britac.ac.uk/funding/guide/intl/jsp.cfm>

RS: <https://royalsociety.org/grants/schemes/jsp-postdoctoral/>

### ◆ Invitation Fellowship Programmes (Long-term/ Short-term/ Short-term S)

\*These programmes are designed to enable Japanese researchers to invite their overseas colleagues to Japan to participate in cooperative work and other academic activities. Researchers of all countries having diplomatic relations with Japan are eligible. Applications are submitted by the inviting researchers who wish to host overseas researchers in Japan.

JSPS offers three Invitation Fellowships, which are Long-term programme for lecturer to professor level, Short-term for reader and professor etc. level, and Short-term S for Nobel laureate level. Please check JSPS website as below for more details.

Call for FY2016 (2nd Recruitment)

#### Short-term

Duration: 14 to 60 days

Application period: 26, Apr 2016- 6, May 2016

Commencement: 1, Oct 2016– 31, Mar 2017

#### Short-term S

Duration: 7 to 30 days

Application period: 26, Apr 2016- 6, May 2016

Commencement: 1, Oct 2016– 31, Mar 2017

<http://www.jsp.go.jp/english/e-inv/index.html>

## JSPS London Events

### ◆ Symposium

• JSPS- JSC Collaborative Symposium:  
“**Cultivating UK-Japan Research Collaboration through Sports**”  
on 18, Dec 2015 at Loughborough University’s London Campus,  
Queen Elizabeth Olympic Park, London

\*by invitation only

<http://www.jsp.org/event/2015/10/jsp-jsc-collaborative-symposium-cultivating-uk-japan-research-collaboration-through-sports.html>

• UK-Japan Symposium:  
“**Atomic and Molecular Manipulation: Force and Tunnel Current in Scanning Probe Microscopy**”

on 15 to 16, Dec 2015 at University of Nottingham

<http://samm.iopconfs.org/home>

• A joint event with the British Academy:  
“**Issues of Globalisation- Growing Cities/ Growing Divides**”

on 27, Jan 2016

\* Details: TBC- Please see JSPS website for the latest information.

<http://www.jsp.org/event/2015/10/index.html>

### ◆ JSPS Programme Information Event

- on 9 Dec 2015 at Imperial College University
- on 11 Feb 2016 at Newcastle University

\*JSPS London visits universities in the UK time to time, to have a programme information event to introduce and explain our funding programmes. If you have any interest, please contact JSPS London.  
(Nishizawa)



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)

14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom

Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669

E-mail : [enquire@jps.org](mailto:enquire@jps.org) | <http://www.jsp.org>



JSPSニュースレター

監修: 竹安邦夫

編集長: 大萱千草

編集担当: 岡田高文